

# 権力構造への挑戦

——メアリー・E. ウィルキンズ・フリーマンの短編より——

種子田 香

**Synopsis:** According to Charles Miner Thompson, Mary E. Wilkins Freeman's writings are less important than the male writer's works. He said "[Wilkins would] have learned to look at life as the men look at it, with the larger and more catholic household" (Reichardt 81). Although she was one of the first American women writers to support herself fully by her writing, and her stories were very popular at that time, she got severe criticism and was neglected from 1930s to 1960s. In this paper, I would like to point out the writer's revolt against the 19<sup>th</sup> century social values created by male authority, and reveal the power structure between genders which led her stories to be disregarded, as well as the author herself.

## 1. はじめに

批評家のチャールズ・マイナー・トンプソンは、メアリー・E. ウィルキンズ・フリーマンの作品を評論し、「バランスのとれた適正な解釈をする」と19世紀に高く評価されていた(Reichardt 81)。しかし、1899年、トンプソンは、「ウィルキンズは男性作家のように、もっと大きく幅の広い家族関係を使って人生を眺めたほうが良いだろう。彼女の題材は女たちの無駄話であって、当然ながら家族の口げんかや不仲に関するものばかりであり、登場人物たちにとってはそういった瑣末なことが人生最大の悲劇なのである」(Reichardt 81)と評している。男性的な視点に欠けるという理由から、フリーマンは取るに足りない作家であるとトンプソンに決めつけられてしまったようである。

フリーマンは19世紀末当時、多作な人気作家であったが、1930年代から60年代にかけてまったく注目されなくなった。1974年にフェミニスト

・プレスがフリーマンの作品集を出版するまで、19世紀の忘れられた作家の一人であった。確かにフリーマンは、衰退しつつあるニューイングランドの静かな村で貧しい生活をおくる年老いた女性に注目し、ありふれた日常生活の一片を切り取って作品にしている。しかしながら、彼女の作品に登場する一見平凡な人物たちは、実は誰よりも人生に果敢に挑戦し、自分の信念へ情熱を持ち続け、ひとたびそれが脅かされるとなれば命懸けで戦う悲しいまでの勇者たちなのである。

こういった登場人物たちの熱い戦いは、取るに足りない作品ばかり書くと批評されていた作者が、自分を投影して描いたと考えられる。この拙稿では、フリーマンの短編「ニューイングランドの尼僧」、「村の歌手」、「女流詩人」を読み解くことにより、単純で残酷な二項対立的価値観を基軸としていた当時の社会システムに、作者がどのように異議申し立てしようとしていたのか探りたい。

## 2. 限られた選択肢

アメリカの初期の歴史において、ニューイングランドは文化の中心地であり、多くの作家や批評家が居を構え、最新の文学を発信していた。ニューイングランドは最も影響力の強い地域であり、アメリカ人の価値観を創造し、発信する場所でもあった。例えば、批評家ナンシー・コットは、「家庭を崇拜」する文学もまたニューイングランドが発祥であろうと考えている（Cott 10）。小説の中で女性の守るべき規範が形作られていき、全米中の読者にその価値観が伝わっていったのである。

しかしながら南北戦争後の半世紀、ニューイングランドは衰退期を迎える。これはちょうどフリーマンの活躍した時代と重なるが、フリーマンが描き続けたニューイングランドの風景は、もはや文化の繁栄をはこる地域ではなく、衰退しつつある地域として軽視されつつあった（vii）。そのような時代の流れの中、フリーマンの物語には既存の社会体制に挑戦するような主人公が描かれている。ヒロインである女性は結婚せず家族もいないが、誰にも

束縛されない生活にプライドをもっている。彼女たちは経済的にも社会的にも恵まれず孤立し、細々と生計を立てているが、他人に自分の領域を踏み荒らされるよりも孤独であることを選り、精神的な喜びに大きな価値を見出している。

しかし周囲の人々は、主人公の孤独や経済的不安定さだけに目を奪われて、主人公の精神的な充足感を理解しようとしなない。この周囲の人々の同情と主人公の幸福感の乖離は、作者が皮肉をこめて描いている。また、主人公が時代の変化についていけず、周囲の人々と対立する姿は、以前のような繁栄を享受していないニューイングランドの様子とも重なる。代表的な短編「村の歌手」と「ニューイングランドの尼僧」を読み解くことで、時代の流れに取り残された女性の生き方を考えたい。

「村の歌手」の主人公、キャンダス・ウィットコムは教会の聖歌隊でリードソプラノとして主旋律を 40 年以上も歌い続けてきた。聖歌隊の中でリードソプラノだけが、少ないながらも賃金を支払われる役職であり、独身の彼女はその収入で生計を立てていて仕事にプライドをもっていた。この 40 年もの間、教会の会合に一度も欠席せず、その仕事に情熱をささげてきたのである。しかし年をとったキャンダスにはその仕事が不適切になってきたという理由で、周りの人々はその仕事を彼女から取り上げて、アルマ・ウェイという女性にその役割を渡そうとする。アルマはキャンダスの甥と 10 年間も交際していたが、結婚後の家を持つ余裕がなく結婚に踏み切れないでいた。そうこうするうち、アルマもまた若かったころの美しかった容姿を失いつつあった。

ここで興味深いことは、アルマがキャンダスの敵として描かれているのではなく、キャンダスに共感を抱き、彼女の立場に誰よりも理解と優しさを示すことである。キャンダスが生きがいとしてきたリーディングソプラノの仕事を奪うことになり申し訳ないとさえ感じていた。キャンダスは激しく抵抗したが、結局、リーディングソプラノの仕事、彼女の家、その他すべてをアルマに譲ることを最後に申し出る。キャンダスとアルマは一つの仕事をめぐって対立的な構造に追い込まれるが、そういう状況の中でもお互いを憎しみ

合ったり、傷つけあうことはない。彼女たちはお互いの立場をわかりあえる一番の理解者なのであろう。アルマに後を託し、精力的だったキャンダンスは生きる気力を失い、1週間のちに静かに息をひきとる。

「村の歌手」と同じ展開を「ニューイングランドの尼僧」にも見ることができる。ここではルイーザ・エリスとリリー・ダイヤーという女性たちが、一人の男性をめぐるトラブルに巻き込まれる。ルイーザがジョー・ダジェットと15年間も婚約関係にあったのは、二人が婚約した直後、ジョーはオーストラリアにひと稼ぎしにでかけ、財産ができて戻ってきたときには14年が経っていたという理由からであった。ルイーザは15年間の独身生活を気楽にそして自由に過ごしたので、いざ結婚ということになると、いささか不安にさいなまれる。そういった中、結婚を一週間後に控えたある日、ルイーザは、ジョーとリリーが立ち話しているところを偶然見つける。リリーは村でも評判のしっかり者であったが、ジョーと彼女はお互いに愛情を感じていることを、ルイーザは知ってしまうのである。ジョーが「14年も待たせていたルイーザに別れを告げて気持ちを踏みこじることはできない」と言う、リリーも「ジョーがそんなことをしても、私はあなたと一緒にならない」と強い口調で告げる。翌日、ルイーザは、リリーの名前は決して口に出さなかったが、一人の時間を過ごしすぎたから、いまさら生活を変えることがいやになったと話し、翌週に迫った二人の結婚を取りやめにする。

「村の歌手」と「ニューイングランドの尼僧」のように、彼女の作品には長年大切に思っていたものをあきらめなければいけない主人公がしばしば登場する。その際、自分よりも若い女性が後釜に座るにもかかわらず、ののしり合いや憎しみ合いには発展せず、お互いの立場を理解しあい優しい気持ちを持ち続ける。このような女性登場人物同士の思いやりの描写は、フリーマンが女性同士の絆を重要視していることを示しているだろう。限られた領域でしか能力を発揮する機会がない女性たちは、お互いの難しい立場を理解しあい、怒りの矛先は白人男性の作り出した仕組みに向けられる。フリーマンのヒロインたちは限られた選択肢しか与えられていないにもかかわらず、与えられたチャンスを精一杯に生かそうと努力し、社会慣習が彼女たちの行く

手を阻む時には果敢に立ち向かう勇気を持ち合わせている。

### 3. 権威への挑戦

19世紀のユニテリアン派の牧師、ジョージ・W. バーナップが説教で述べたように、結婚は「女性にもともと備わっている社会的身分で、…妻としてのみ女性には社会に重要な貢献ができる」と考えられていた（Welter 37）。父親や夫に守られ、家庭をきりもりしていくことによってのみ、女性は能力を発揮できるとみなされ、そのような考え方は当時の多くの小説にも反映されていた。結婚すれば女性は幸せになり、そうでなければ女性としての役割を果たせない、という単純な二項対立的価値観に女性たちは無理やり押し込まれようとしていたのである。

しかしフリーマンの女性主人公たちは、このバーナップの説教が表明している価値観からはずれており、当時の男性からは理解しがたい人物として描かれている。小さな村という共同体の中で、権威者である牧師にたてつく老女は、頭がおかしくなった、性格がひねくれているなどとみなされ、彼女たちの主張に耳を貸そうとする村人はいない。結局は主人公たちが非を認めて謝るのであるが、牧師のほうこそ配慮に欠けていて思慮が浅いと読者に感じさせるフリーマンの描き方に、既成概念への挑戦が表れている。ここでは、「村の歌手」と「女流歌人」を具体例として取り上げたい。

「村の歌手」では、先ほど言及したように、キャンダスが教会の聖歌隊でリーディングソプラノの職を辞すようにうながされるが、ボラード牧師が主になってその決断を遂行しようとしている。彼はキャンダスがリーディングソプラノになったのと同時期に牧師として教会に赴任し、キャンダスと同じように40年間その聖職に携わっていた。しかし、今や辞めるのは彼女一人で、ボラード牧師は聖職に居座り続けることを当然と考えていた。キャンダスは必死になってボラード牧師に訴える。「もし、もう年だから仕事をやめろと言われ、若い誰かが来てあなたと代われと言われたら、あなただったらどう思いますか？」彼女は繰り返し“S’pose”（=suppose）を使って、「も

しあなただったらどう思うか想像してほしい」と訴える。

しかし、世間から尊敬されるのが当然と思っている牧師にとって、自分がそのような立場に追い込まれることなど到底想像できないことであり、キャンダスの訴えはただむなしく響き、彼の胸には届かない。同じように教会で仕事をしていても、男性ならば年齢に関係なく続けることができ、女性は辞めなくてはいけないのはなぜかという率直な疑問は、牧師にも答えることはできなかった。ただ、そういうものだから、社会でそうするのが当たり前になっているからという理由で、戸惑いながらも特に説明することすらしない。「キャンダスは頭がおかしくなった」と一足飛びに結論付け、ポラード牧師は当時の社会通念を味方につけて、キャンダスを追放してしまう。

「女流歌人」では牧師の言動がさらに深刻な事態を引き起こす。ベッツィー・ドールは50歳を過ぎるが、詩を書くことに情熱を持ち続けている。いつものようにベッツィーが庭で野菜の手入れをしていたところ、息子を亡くして喪に服しているカクストン夫人がやってきて、息子のために詩を書いてほしいと頼む。印刷して配りたいと聞き、ベッツィーは全力を傾けてその仕事に取り組む。食べるものにも着るものにも興味がなく、父親の残したわずかな遺産で20年以上やりくりしているベッツィーにとって、詩を書くことは唯一情熱を傾けられる生きがいであり、生きることと同じ意味を持っていた。

しかし、出来上がった作品について、「あんなひどい詩はみたことがない」と牧師が酷評していたことを伝え聞いたベッツィーは深く傷つき、自分が今まで書きためた詩をすべて焼却し、その灰を陶器の青い砂糖つぼに入れた。「彼女には生涯、恋人はいなかった。しかし、彼女と人生の間でやり取りされたラヴレターのすべてを燃やしてしまったのである」(195)。それは一種の自殺行為であり、火葬の灰を骨壺に入れる魂の葬式であった。孤独な生活を支える生きがい、詩とともに灰と消えたのである。ここに見られる大きな皮肉は、田舎の牧師に批評されたとはいえ、彼女の詩の真価を知っているものは誰もいないということである。実はベッツィーは牧師が足元にも及ばないような素晴らしい詩人だったかもしれないが、その才能は真価を問うチ

ヤンスすらないまま灰になってしまったのである。

生きる気力を失ったベッツィーは日に日に衰え、ついに死の床についた。彼女は牧師を呼び、二つのことを頼む。一つ目は、自分が死んだあと、詩を焼いた灰が入った壺を自分の遺体と一緒に墓に埋めてほしいということ、もう一つは自分が死にゆく場面を詩に書いてほしいということである。この頼みを聞いた牧師は、「村の歌手」の牧師同様に、ベッツィーがついに頭がおかしくなったと思うが、たじろぎながらもそれらの遺言を引き受けた。

この最期の頼みは、ベッツィーの復讐とも、許しともとれるように描かれていて、判断はそれぞれの読み手に委ねられている。ベッツィーを主題にした詩を書くということは、彼女のことを知らねばならない作業であり、牧師は何も彼女のことがわかっていないので、今のままでは良い詩を書くことはできないであろう。そういう意味では復讐ともとれるが、牧師を憎むのではなく、彼にチャンスを与え、許すことで、死にゆく自分の心を軽くしようと努めているようにも解釈できる。いずれにせよ、この短編はベッツィーのカナリアが「勝ち誇ったように歌った」という文章で終わっており、ベッツィーは命懸けの勝負に勝利したことが暗示されている。

批評家ガードナーは、フリーマンの作品に登場する牧師はみんな「役に立たない一人の人物」(Gardner 453)として、同じ役割を果たしていると述べている。主人公たちの牧師に対する挑戦は、無神経な牧師にとっては取るに足りないものであり、命をかけるほど重要なものとは思ってもよらない。ベッツィーやキャンダスの戦いは彼女たちにとっては命を犠牲にしなければならないほど重いものであったにもかかわらず、その真剣さは牧師にとっては狂気でしかなく、彼女たちの死後もさして気にもとめられないと考えられる。双方の認識にこれほどのずれがあることを示し、権力構造の外に置かれた女性の立場を描くことで、フリーマンは 19 世紀末のアメリカの社会構造に潜んでいるジェンダーの問題はとても認識されにくく、無視されがちであったことを指摘している。

#### 4. 結 び

婚約者の帰りを 15 年も待ったルイーザのように、主人公たちにとって選択肢は多くない。父親が他界してから 20 年間、同じように生活を受け、詩を書き続けていたベッツィーや、40 年間、教会のリーディングソプラノを続けてきたキャンダスにとって、今の生活を変えることは死活問題であり、与えられたわずかなチャンスを生かそうと、精いっぱい努力して自分なりの幸せを見つけている。

その際、年老いた主人公と比較的若い女性が、一つの仕事や男性をめぐって争いに巻き込まれ、結局は主人公が道を譲るが、主人公の敵意が相手の女性に向けられることはない。若い女性も悪者として描かれず、本来なら仲良くできたであろう二人が、一つのパイをめぐって戦わざるをえなくなる状況の方に、作者の悲哀の目が向けられている。19 世紀においては、女性は限られた選択肢しか与えられておらず、その数少ないチャンスを争うよう仕組まれていたが、フリーマンはどこにその元凶があるのかを正確に見抜いていた。ジェンダーの問題を繰り返し作品で扱うことによって、フリーマンは女性の生き方や価値観を一通りに限定するべきではなく、多様な中から個人が選択できる社会にするべきだと提案している。

実は、登場人物以上に、作者のフリーマンの結婚に至る道は平坦ではなかった。1892 年に夫となる外科医のチャールズ・フリーマンと出会うが、10 年間の交際中、婚約を破棄したり、結婚を延期したりと、1902 年について結婚の決心をするまで悩み続けた。チャールズは大酒飲みで、女遊びや駆け落ちまでしたことがあるという評判で、彼と結婚すれば自分自身を失ってしまうかもしれないという不安が常に彼女の心につきまとった。それでもついに結婚したのは、売れっ子作家だった彼女は、いつ結婚するのかとしつこく新聞記者に付きまとわれ、プライバシーを侵害されることを恐れたためではないかとマージョリー・プライスは考えている (xv)。チャールズとの幸せな時間は短く、1909 年頃からチャールズはアルコール依存症のために入退



院を繰り返し始め、1923年にはついに死亡する。

1930年にはメアリー・フリーマンも他界するが、それまでに彼女は多くの作品を書き上げ、大変な人気を博した。彼女は自分の収入で生計を立てることができた初めてのアメリカ女性作家の一人であった。取るに足りない主題を書くとは評されても、作者自身は書くことを止めなかった。フリーマンにとって小説を書くという行為は、ただ単に読者を楽しませるためだけでなく、社会に潜む問題点を糾すチャンスでもあったのである。女性が多く選択肢を与えられる社会を目指し、フリーマンはニューイングランドの静かな田舎町におけるジェンダーの権力構造を物語に描き続けた。彼女が百年前に投げかけた問題は、時代や場所を越えて再評価されている。

#### Works Cited

- Cott, Nancy. *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835*. New Haven; Yale UP, 1977.
- Freeman, Mary E. Wilkins. *Selected Stories of Mary E. Wilkins Freeman*. Ed. Marjorie Pryse. New York: W. W. Norton & Co., 1983.
- Gardner, Kate. "The Subversion of Genre in the Short Stories of Mary E. Wilkins Freeman." *The New England Quarterly* 65.3 (1992) : 447-468.
- Reichardt, Mary R. "Mary Wilkins Freeman: One Hundred Years of Criticism." *Critical Essays on Mary Wilkins Freeman*. Marchalonis, Shirley, ed. Boston: G. K. Hall & Co., 1991.
- Welter, Barbara. *Dimity Convictions: The American Woman in the Nineteenth Century*. Athens: Ohio UP, 1976.